

# 終助詞“よ”と“ね”の発話から聞き手が推測する 話し手との人間関係

目白大学大学院心理学研究科 福島 和郎  
目白大学人間社会学部 岩崎 庸男  
目白大学人間社会学部 渋谷 昌三

## 【要約】

終助詞表現を位相語として扱った研究はあまり存在しないが、終助詞“よ”や“ね”は心理的・社会的要因により使い分けられる可能性がある。本研究は、“終助詞なし”、“よ”、“ね”の文末表現に言い換え可能な典型的発話文を参加者に提示し、各終助詞表現を、参加者の周囲の人物が普段どの程度発話すると感じるのか、聞き手側の視点に立つ参加者の印象傾向を検討した。その結果、父親の発話に、全般的に“終助詞なし”が多いと感じることや、友人の発話と両親の発話で印象傾向の異なる発話場面が見られるなど、話し手が参加者と心理的・社会的にどのような関係にあるかによって、話し手による終助詞表現の発話に印象の違いを感じる事が明らかになり、“よ”と“ね”の位相語としての特徴が確かめられた。また、“評価”形式と関係する発話場面では一貫して“よ”の発話が多く、“認識”形式と関係する発話場面では全般的に“ね”の発話が多く、“勧誘”形式と関係する発話場面では全般的に“終助詞なし”と“よ”の発話が多いと感じるなど、日常会話には、人間関係を背景とした使い分けの傾向に加え、人物の違いを超えて、特定の終助詞表現の発話される発話場面が存在することも明らかになった。

キーワード：終助詞“よ”と“ね”，位相語，人間関係，印象，発話場面

## 研究の背景と目的

話し手がある話題を聞き手に伝える際、発話場面に応じた聞き手との心理的関係や社会的立場によって発話の仕方が異なる。主語が動詞の語形を決定する欧米の言語に対し、日本語の場合、発話場面に応じた話し手と聞き手との心理的・社会的関係、すなわちコンテキストによって述部の言語形式が変化することは、今日、文法研究の分野で一般に指摘されている（井出、1999等）。

こうした特徴を示す日本語表現の1つに、例えば、ある社員が自分のことを同僚の前では“僕”と表現し、上司の前では“私”と表現するといった、発話時の話し手と聞き手との人間関係を背景とした言葉の使い分けが挙げられる。こうした使い分けは一般に“位相”と呼ばれ、今日の文法研究の重要な課題の1つに挙げ

られている。田中（1999）は位相を“社会的な集団や階層、あるいは表現上の様式や場面それぞれにみられる言語の特有な様相”として捉え、これを“社会的位相（身分・階層、社会集団によるもの等）”“様式的位相（書きことば・話しことばの差異、場面・相手の差異によるもの等）”“心理的位相（仲間意識、対人意識・待遇意識によるもの等）”の3つの観点から分類している。

ところで、終助詞“よ”や“ね”（以降“よ”や“ね”）を位相語として扱った研究はあまりないが、“よ”や“ね”も、日常生活の中で無意識のうちに使い分けられることが多い文末表現である。例えば、一緒に作業をしている体調の悪そうな相手に“少し休んだほうがいい。”と声をかける際、“少し休んだほうがいいよ。”と発話しても“少し休んだほうがいいね。”と

発話しても、大意に違いはほとんど見られない。話し手は、統語的規則に従って“終助詞なし”、“よ”、“ね”を選択しているのではなく、発話時の話し手と聞き手との心理的・社会的関係を考慮しながら、無意識のうちにこれらの文末表現を使い分けている可能性がある。

“よ”や“ね”の性質（文法的意味）をどのように捉えるかについては、研究分野によって様々な解釈が存在する（福島・岩崎・渋谷，2006）。国文法の分野には、“よ”を“話し手自身の意向に深く関わる”という話し手の態度として捉え、“ね”を“話し手の聞き手に対する問いかけ、同意を求めるような気持ち”という話し手の態度として捉えた研究があり（鈴木，1976）、発達研究や自閉症研究の分野にも、“よ”や“ね”を話し手の態度表明として捉えた研究がある（Kajikawa, Amano & Kondo, 2004；綿巻，1997）。これに対して、日本語文法、日本語教育、言語心理学の分野には、“よ”を“対立型の判断（益岡，1991）”、または“情報が話し手により近い、あるいは話し手に占有されている（Maynard, 1993）”等の意味情報として捉え、“ね”を“一致型の判断（益岡，1991）”または“情報が聞き手により近い、あるいは聞き手に占有されている（Maynard, 1993）”等の意味情報として捉えた研究があり、さらに、認知科学の分野には、“よ”を“当該の発話を関与的なものとして登録せよ”という操作指令として捉え、“ね”を“当該の発話を、マッチする特定の文脈とリンクせよ”という操作指令として捉えた研究がある（金水，1993）。

以上の解釈のうち、仮に、“よ”や“ね”が“意味情報”としての性質をもたず、聞き手に対する“話し手の態度表明”もしくは“操作指令”としての性質をもつものであるとすれば、話し手の態度を表明する相手である聞き手、あるいは操作対象としての聞き手との心理的・社会的な関係を反映して、“よ”や“ね”は使い分けられる、すなわち、位相語として機能することが予想される。

本研究は、社会生活における典型的発話場面において、参加者の周囲の人物が“終助詞なし”、“よ”、“ね”の各文末表現を普段どの程度発話すると感じるのか、聞き手側の視点に立つ参加

者の印象傾向を研究する。これにより、“よ”と“ね”の位相語としての特徴が明らかになり、また、聞き手との心理的・社会的関係が言葉の使用に与える効果についても、何らかの示唆を得ることが期待される。

本研究は、次に、“よ”と“ね”が発話者の違いを超えて全般的に発話されると感じられる具体的な発話場面を明らかにする。これにより、“よ”と“ね”の性質を解明するための重要な手掛かりを得ることが期待される。

今日、国立国語研究所の調査においても、これまで“敬語”、“待遇表現”、“敬意表現”と呼ばれてきた表現を“言語行動における配慮”という幅広い視点から捉え直す動きが見られるなど（杉戸・尾崎，2006）、文法研究においても言葉の使用の背景にある心理的・社会的要因への関心が高まりつつある。また、心理学分野においても、視線行動と発言行動という非言語チャンネルと言語チャンネルの両面から対人コミュニケーション機能を捉えた研究も行われ始めている（大坊，1982）。

こうした動向をふまえ、本研究は、聞き手との心理的・社会的関係が“よ”と“ね”の発話に及ぼす効果を検討し、“よ”と“ね”の特徴を明らかにすることを目的とする。

## 方法

### 研究方法

**質問紙調査法の選定** 本研究は、“終助詞なし”、“よ”、“ね”の各文末表現に言い換え可能な一定数の典型的発話文を参加者に提示し、それぞれの表現を普段周囲の人物がどのように発話すると感じるのか、参加者の印象傾向を調査する。こうした調査を簡便に行い、安定した数の参加者の一般的傾向を測定するため、本研究では質問紙調査法を採用する。

発話表現に関する調査を質問紙法によって行う場合、文字化された1つの発話文に対して複数のイントネーションが想定され、調査時に参加者が想定したイントネーションを特定できないという問題が伴う。しかし、この問題に対処するため協力者が実際に各発話文を発音する等の手段をとると、測定される文末表現の印象に

発音した協力者の印象が反映され、また、質問紙にイントネーションを明記する方法をとると、明示自体が参加者へのバイアスとなることが懸念される。こうした理由を考慮し、本研究は質問紙法を採用し、参加者が自然に想起するイントネーションで発話文を理解するよう求めることにする。

また、本研究は、一般性を重視する立場から、“今日はいい天気ね。”といった女性特有の発話文を調査内容から外し、一般に性差がなく使われると考えられている発話文を参加者に提示することにする。

**発話場面の選定** 発話表現に関する調査を質問紙法によって行う場合、参加者によって文脈理解が異なるために想定する発話場面が異なり、発話文に対する参加者の感じ方も異なるという問題が伴う。この問題に対処するため、岡本（1993）に代表される従来の研究は、限定的な発話文に詳細な文脈説明を加え、参加者が想定する発話場面の統一を図り、参加者による発話文の解釈の一致を試みている。しかし、発話表現に対する印象傾向を調査する研究にこれと同じ方法を採用することは妥当でないと考えられる。提示される発話文の数が限定されるばかりでなく、文脈説明が詳細になるほど、参加者が発話文から感じ取る印象が誘導されやすくなる恐れがあるからである。

最小限の文脈で発話場面を説明し、かつ解釈の相違の少ない典型的発話文を設定するため、本研究は、宮崎（2002）による“モダリティ形式<sup>1</sup>”を参考にして各発話形式（命令：しろ、依頼：して、勧誘：しよう、希望：したい、評価：したほうがいい、認識<sup>2</sup>）に忠実な発話場面を選定し<sup>3</sup>、発話場面に従って発話文を設定する方法を採用する。従来の研究のように、例えば、“頑張って”という発話文を先に設定してから発話場面を決める場合、実際に参加者が想定する発話場面は、文脈説明によって“励まし”にも“諭し”にもなり得ることが予想される。これに対し、発話形式に従って先に発話場面を選定する場合、“頑張って”という発話文の“して”形式は、典型的には宮崎（2002）による発話形式の“依頼”形式に相当するため、発話場面を“依頼”とし、依頼場面に忠実な発

話文（例：テレビをつけて。）を設定することが求められる。このようにして設定された発話文は、文脈説明を最小限に留めても、一般に“依頼”場面の発話として参加者に想定される可能性の高いことが予想される。

本研究は、次に、相手の発話に応答する発話文の“ね”という文末形式に相手の主張を拒絶する用法のあることが蓮沼（1988）や野田（2002）によって指摘されていることから、こうした発話が周囲の人物によってどのように発話される印象傾向にあるのかを確かめるため、上記の発話形式に加え、応答場面での“（応答）否定の希望：したくない”形式を発話場面に加える。また、この形式との比較のため、一般的な応答場面での“（応答）認識”形式も発話場面に加えることにする。

以上の手続きをふまえ、本研究では以下の8つの発話文を設定した。ただし、“命令：しろ”形式については、現実には“終助詞なし”と“よ”の文末形式しか使用することができないため、“終助詞なし”と“よ”だけで比較を行い、その他の形式では、“終助詞なし”、“よ”、“ね”の各文末表現で比較を行う。また、調査時には発話形式は明示せず、“終助詞なし”、“よ”、“ね”の各文末表現は、それぞれ文の形に直して参加者に提示した。

- 命令：必ず連絡しろ（—/よ）。
- 依頼：テレビをつけて（—/よ/ね）。
- 勧誘：映画に行こう（—/よ/ね）。
- 希望：（芸能人Aが大学に講演に来るという案内を見て）  
Aに会ってみたい（—/よ/ね）。
- 評価：（体調の悪そうなあなたに）  
医者に行ったほうがいい（—/よ/ね）。
- 認識：今日は少し寒い（—/よ/ね）。
- （応答）否定の希望：（相手に言い訳をしているあなたに）  
言い訳なんて聞きたくない（—/よ/ね）。
- （応答）認識：（“都合のいい日はいつか”と尋ねられて）  
火曜日か水曜日です（—/よ/ね）。

**発話者の設定** 参加者（4年生大学の学部生）の周囲に存在し、日常的に参加者と接すること

が予想される人物として、参加者の両親と男女の友人を想定した。男女の友人については親密さの程度によって発話表現の異なることが想定されるため、Levinger & Snoek (1972) による3段階の対人関係レベルを参考にして、相互会話が成立する相手として、surface contact レベルと mutuality レベルに相当する、“挨拶をするなどの表面的なつきあいの友人”と“一緒に話したり行動したりして、気持ちがわかりあえる友人”の2段階を想定した。以上の手続きをふまえて、以下の6タイプの人物を発話者として設定した。

- ・ 父親
- ・ 母親
- ・ 挨拶をするなどの表面的なつきあいの同性の友人
- ・ 挨拶をするなどの表面的なつきあいの異性の友人
- ・ 一緒に話したり行動したりして、気持ちがわかりあえる同性の友人
- ・ 一緒に話したり行動したりして、気持ちがわかりあえる異性の友人

さらに、友人に関して、上に挙げたタイプの友人が参加者とどのような関係にあるのかを確かめるため、それぞれの友人の具体的属性を記述するよう参加者に求めた。

**評定の方法** 発話形式と発話者のタイプを組み合わせて質問項目を作成した。普段、参加者の周囲にいる6タイプの人物が、参加者に対して各発話形式における“終助詞なし”、“よ”、“ね”の文末表現を発話するのを、参加者がどの程度耳にするかについて、耳にすることが、1. ない、2. あまりない、3. どちらとも言えない、4. 時々ある、5. よくある、のいずれに該当するか、同意の程度について参加者の評定を求めた(5件法)。

#### 参加者

私立4年制大学の心理学系の基礎教育科目を履修している1年生を中心とする大学生のうち、日常生活において6タイプの人物が周囲に存在する参加者100人(男子38人、女子62人)に、質問紙調査を実施した。

#### 実施

平成16年5月、質問紙調査(無記名)を実施した。その際、発話場面ごとに“終助詞なし”と終助詞つきとを比較しながら回答するよう参加者に教示した。また、イントネーションについては、各自が自然に想起するイントネーションで質問紙の発話文を理解するよう、参加者に求めた。所要時間は約15分であった。

#### 結果

##### 発話者の属性

男性参加者と女性参加者双方が記述した各友人の属性には、性別による違いはほとんど見られなかった。各友人の主な属性は以下の通りである。

“挨拶をするなどの表面的なつきあいの同性の友人”は、同じサークルの人、同じクラスの人、隣のクラスの人、他学部の人、同じ授業をとっている人、地元の知り合い、バイト先の同僚等で、参加者と、あまり話をしない、顔を合わせる機会が少ない、授業やサークルが同じでも関わりが少ない、等の関係にある人物であった。

“挨拶をするなどの表面的なつきあいの異性の友人”は、“表面的なつきあいの同性友人”とほぼ同じ属性にあり、参加者と、あまり深く話したことがない、知り合ってから期間が浅い、知り合いになったがその後の関わりがない、等の関係にある人物であった。

“一緒に話したり行動したりして、気持ちがわかりあえる同性の友人”は、幼馴染、昔からの友人、長いつき合いの友人、よく会って話す人、常に一緒にいる親友等で、参加者と、気が合う、趣味が合う、一緒に馬鹿話ができる、一緒に遊んでいて楽しい、等の関係にある人物であった。

“一緒に話したり行動したりして、気持ちがわかりあえる異性の友人”は、彼氏、彼女、恋人、以前つき合っていた彼女、メールや電話をよくする人等で、参加者と、何でも言い合える、相談できる、お互いに深い話をしてきた、等の関係にある人物であった。

以上の記述内容は、Levinger & Snoek (1972) による対人関係のレベルから予想される友人の

特徴とほぼ一致するものであった。

**発話者別および発話場面別の評定値の比較**

次に、男性参加者と女性参加者双方で、発話者として設定した6タイプの人物について発話形式ごとの終助詞間の評定平均の比較をするため、反復のある一要因分散分析を行い、有意差の見られたものについてLSD法による多重比較

を行った。男性参加者の結果をTable 1に、女性参加者の結果をTable 2に示す。また、Table 1とTable 2の分析結果をまとめたものをTable 3に示す。なお、Table 1からTable 3は有意差の見られた結果を表示したもので、男女の参加者のどちらにも有意差の見られなかった“(応答)認識”形式の結果は示されていない。

**Table 1 発話者による文末表現の違いに関する印象評定 (男性参加者)**

	なし (N=38)	よ (N=38)	ね (N=38)	F値	
<b>命令：必ず連絡しろ</b>					
父親	2.61 (1.44)	2.95 (1.64)		4.50*	よ>なし
母親	1.89 (1.03)	2.26 (1.38)		4.67*	よ>なし
男性理解友人	2.39 (1.48)	3.47 (1.39)		21.89**	よ>なし
女性理解友人	2.00 (1.11)	2.53 (1.28)		8.56**	よ>なし
<b>依頼：テレビをつけて</b>					
父親	2.92 (1.58)	2.31 (1.35)	1.34 (0.62)	24.18**	なし>よ>ね
母親	3.13 (1.54)	2.76 (1.58)	1.73 (1.31)	20.89**	なし>よ>ね
男性理解友人	3.21 (1.47)	2.97 (1.46)	2.05 (1.29)	13.45**	なし,よ>ね
女性理解友人	3.11 (1.44)	2.97 (1.30)	2.00 (1.23)	12.98**	なし,よ>ね
<b>勧誘：映画にいこう</b>					
父親	1.71 (1.13)	1.55 (1.00)	1.26 (0.60)	3.33*	なし>ね
母親	1.60 (1.02)	1.71 (1.16)	1.32 (0.70)	4.17*	なし,よ>ね
男性表面友人	1.71 (0.95)	2.13 (1.16)	1.71 (0.98)	5.27**	よ>なし,ね
男性理解友人	3.55 (1.22)	3.71 (1.29)	2.71 (1.39)	13.84**	なし,よ>ね
女性理解友人	2.97 (1.46)	3.50 (1.24)	2.79 (1.37)	9.32**	よ>なし,ね
<b>評価：医者に行ったほうがいい</b>					
父親	3.52 (1.39)	3.23 (1.30)	2.47 (1.39)	11.84**	なし,よ>ね
母親	3.28 (1.41)	3.45 (1.20)	2.50 (1.33)	8.71**	なし,よ>ね
男性表面友人	2.00 (0.98)	2.61 (1.24)	2.24 (1.12)	9.04**	よ>なし,ね
女性表面友人	2.00 (0.93)	2.73 (1.24)	2.23 (1.05)	13.30**	よ>なし,ね
男性理解友人	3.16 (1.38)	3.97 (1.07)	3.05 (1.33)	9.74**	よ>なし,ね
女性理解友人	2.95 (1.48)	4.00 (1.06)	3.08 (1.36)	12.67**	よ>なし,ね
<b>認識：今日は少し寒い</b>					
母親	2.52 (1.35)	3.36 (1.32)	3.26 (1.50)	6.43**	よ,ね>なし
男性表面友人	2.71 (1.37)	2.97 (1.28)	3.42 (1.30)	7.04**	ね>なし,よ
女性表面友人	2.55 (1.28)	2.97 (1.15)	3.63 (1.23)	14.28**	ね>なし,よ
男性理解友人	3.21 (1.39)	3.84 (1.02)	4.31 (0.73)	13.24**	ね>よ>なし
女性理解友人	2.89 (1.37)	3.78 (0.90)	4.18 (0.92)	19.33**	ね>よ>なし
<b>“応答” 否定の希望：言い訳なんて聞きたくない</b>					
父親	2.47 (1.48)	1.71 (0.98)	2.21 (1.43)	8.35**	なし,ね>よ
母親	2.39 (1.38)	1.86 (1.14)	2.07 (1.34)	4.69*	なし>よ,ね

平均値 (SD), p\*\* < .01, p\* < .05

男性参加者の結果には、“(応答)認識”形式に加え、“希望：したい”形式でもすべての物の発話に有意差が見られず、女性参加者に比

べ、全般的にはっきりとした傾向が見られなかった。

Table 2 発話者による文末表現の違いに関する印象評定 (女性参加者)

	なし (N=62)	よ (N=62)	ね (N=62)	F値	
命令：必ず連絡しろ					
父親	2.27 (1.32)	2.97 (1.52)		16.36**	よ>なし
女性表面友人	1.29 (0.75)	1.48 (0.98)		6.53*	よ>なし
男性理解友人	2.03 (1.22)	2.56 (1.33)		12.84**	よ>なし
女性理解友人	1.79 (1.16)	2.39 (1.34)		13.34**	よ>なし
依頼：テレビをつけて					
父親	3.66 (1.42)	2.25 (1.47)	1.67 (0.97)	73.08**	なし>よ>ね
母親	4.22 (1.03)	2.71 (1.68)	2.27 (1.46)	50.09**	なし>よ>ね
男性理解友人	2.91 (1.59)	2.17 (1.40)	1.79 (1.24)	19.17**	なし>よ>ね
女性理解友人	3.01 (1.50)	2.25 (1.44)	1.95 (1.38)	18.40**	なし>よ,ね
勧誘：映画にいこう					
父親	1.95 (1.40)	1.79 (1.21)	1.30 (0.73)	10.14**	なし,よ>ね
母親	2.30 (1.53)	2.56 (1.57)	1.95 (1.40)	5.79**	よ>ね
男性表面友人	1.64 (1.07)	1.88 (1.22)	1.61 (1.06)	3.59*	よ>なし,ね
男性理解友人	2.82 (1.44)	3.27 (1.51)	2.50 (1.49)	10.16**	よ>なし,ね
女性理解友人	3.67 (1.31)	4.22 (0.89)	3.48 (1.37)	10.74**	よ>なし,ね
希望：Aに会ってみたい					
母親	2.27 (1.47)	1.83 (1.19)	2.41 (1.51)	6.90**	なし,ね>よ
男性表面友人	2.00 (1.25)	1.75 (1.12)	2.17 (1.31)	6.14**	なし,ね>よ
女性表面友人	2.16 (1.24)	1.91 (1.14)	2.38 (1.33)	5.52**	なし,ね>よ
男性理解友人	3.06 (1.44)	2.66 (1.47)	2.95 (1.47)	4.19*	なし,ね>よ
女性理解友人	3.64 (1.25)	3.03 (1.41)	3.64 (1.16)	8.67**	なし,ね>よ
評価：医者に行ったほうがいい					
父親	3.17 (1.59)	3.35 (1.48)	2.40 (1.55)	11.37**	なし,よ>ね
母親	2.90 (1.51)	3.93 (1.24)	2.61 (1.60)	17.12**	よ>なし,ね
男性表面友人	1.64 (0.99)	2.69 (1.37)	2.00 (1.13)	24.41**	よ>ね>なし
女性表面友人	1.59 (0.93)	2.88 (1.34)	1.98 (1.18)	37.84**	よ>ね>なし
男性理解友人	2.77 (1.56)	3.75 (1.36)	2.67 (1.34)	15.75**	よ>なし,ね
女性理解友人	2.74 (1.50)	4.35 (0.72)	2.85 (1.40)	35.08**	よ>なし,ね
認識：今日は少し寒い					
父親	2.90 (1.55)	3.46 (1.47)	3.03 (1.53)	3.49*	よ>なし,ね
母親	2.80 (1.56)	4.09 (1.05)	3.82 (1.37)	21.84**	よ,ね>なし
男性表面友人	2.12 (1.06)	2.53 (1.31)	3.29 (1.31)	22.49**	ね>よ>なし
女性表面友人	2.19 (1.08)	2.62 (1.35)	3.58 (1.18)	34.51**	ね>よ>なし
男性理解友人	3.06 (1.36)	3.41 (1.36)	3.90 (1.31)	10.63**	ね>なし,よ
女性理解友人	3.24 (1.39)	3.79 (1.13)	4.46 (0.74)	22.18**	ね>よ>なし
“応答” 否定の希望：言い訳なんて聞きたくない					
父親	2.77 (1.59)	1.93 (1.26)	1.83 (1.25)	15.57**	なし>よ,ね
母親	2.83 (1.47)	2.21 (1.35)	2.01 (1.31)	10.15**	なし>よ,ね

平均値 (SD),  $p^{**} < .01$ ,  $p^* < .05$

Table 3 発話者による文末表現の違いに関する印象評定・集計結果

		命令	依頼	勧誘	希望	評価	認識	(応答)希望
父親	男	よ>なし	なし>よ>ね	なし>ね		なし,よ>ね		なし,ね>よ
	女	よ>なし	なし>よ>ね	なし,よ>ね		なし,よ>ね	よ>なし,ね	なし>よ,ね
母親	男	よ>なし	なし>よ>ね	なし,よ>ね		なし,よ>ね	よ,ね>なし	なし>よ,ね
	女		なし>よ>ね	よ>ね	なし,ね>よ	よ>なし,ね	よ,ね>なし	なし>よ,ね
男表面友人	男			よ>なし,ね		よ>なし,ね	ね>なし,よ	
	女			よ>なし,ね	なし,ね>よ	よ>ね>なし	ね>よ>なし	
女表面友人	男					よ>なし>ね	ね>なし,よ	
	女	よ>なし			なし,ね>よ	よ>ね>なし	ね>よ>なし	
男理解友人	男	よ>なし	なし,よ>ね	なし,よ>ね		よ>なし,ね	ね>よ>なし	
	女	よ>なし	なし>よ>ね	よ>なし,ね	なし,ね>よ	よ>なし,ね	ね>なし,よ	
女理解友人	男	よ>なし	なし,よ>ね	よ>なし,ね		よ>なし,ね	ね>よ>なし	
	女	よ>なし	なし>よ>ね	よ>なし,ね	なし,ね>よ	よ>なし,ね	ね>よ>なし	

(5%水準で有意なものをまとめた。)

女性参加者の結果には、“希望：したい”形式で、“父親”を除くすべての人物の発話に“よ”が少ないと感じる等、男性参加者よりも全般的にはっきりとした傾向が見られた。

Table 3 から男性参加者と女性参加者の傾向を比較すると、今回用いた一般性を重視した性差のない発話文では、全体としては、発話に対する男性参加者と女性参加者の印象に大きな違いが見られず、男女の参加者にほぼ共通して、以下のことが明らかになった。

まず、Table 3 を行ごとに比較し、各人物が“終助詞なし”、“よ”、“ね”の文末表現をどのように発話すると感じるか、発話者に対する参加者の印象傾向を検討した。その結果、“父親”の発話に全般的に“終助詞なし”が多いと感じることが明らかになったのに対し、“表面的なつきあいの友人”の発話には全般的にはっきりとした傾向が見られなかった。さらに、より詳しく分析すると、“母親”の発話には、“父親”に次いで、全般的に“終助詞なし”が多いと感じる傾向があり、“気持ちがわかりあえる友人”の発話には全般的に“よ”や“ね”が多いと感じる傾向のあることが明らかになった。

次に、Table 3 を列ごとに比較し、各発話形式において“終助詞なし”、“よ”、“ね”の文末

表現がどのように発話されると感じるか、発話形式（発話場面）に対する参加者の印象傾向を検討した。その結果、まず、“評価：したほうがいい”形式では一貫して“よ”が多く発話されると感じること、“終助詞なし”と“よ”の文末形式しか使用することのできない“命令：しろ”形式でも全般的に“よ”が多く発話されると感じること、“依頼：して”形式では全般的に“終助詞なし”が多く発話され、“ね”はあまり発話されないと感じるようになったが、“命令：しろ”形式と“依頼：して”形式では“表面的なつきあいの友人”の発話にほぼ有意差が見られなかった。また、Table 3 に表記されていない“(応答)認識”形式ではすべての人物の発話に有意差が見られなかった。これらは発話者による違いがはっきりと見られなかった発話形式である。

これに対して、“勧誘：しよう”形式では、全般的に“ね”はあまり発話されないと感じ、“父親”と“母親”の発話には、ほぼ“終助詞なし”が多いと感じ、“気持ちがわかりあえる友人”と“表面的なつきあいの男性友人”の発話には“よ”が多いと感じることが明らかになったのに対し、“表面的なつきあいの女性友人”の発話には有意差が見られなかった。また、

“認識”形式では、全般的に“ね”が多く発話されると感じ、特に友人の発話に一貫して“ね”が多いと感じるのに対し、両親の発話には“よ”が多いと感じ、女性参加者は“父親”の発話に“ね”よりも“よ”が多いと感じることが明らかになった。さらに、“(応答)否定の希望：したくない”形式では、“父親”と“母親”の発話に“終助詞なし”が多いと感じることが明らかになったのに対し、友人の発話には有意差が見られなかった。これらは発話者による違いが比較的是っきりと見られた発話形式である。

以上の結果を2つの観点からまとめると以下のようになる。第1に、父親の発話に全般的に“終助詞なし”が多いと感じることや、“勧誘：しよう”形式、“認識”形式、“(応答)否定の希望：したくない”形式では、両親の発話と友人の発話とで異なる印象がもたれたことから、話し手が聞き手と心理的・社会的にどのような関係にあるかというレベルによって、“終助詞なし”、“よ”、“ね”の発話の仕方に違いの感じられることが明らかになった。

第2に、“評価：したほうがいい”形式では一貫して“よ”の発話が多いと感じ、“勧誘：しよう”形式では全般的に“ね”はあまり発話されないと感じ、“認識”形式では全般的に“ね”の発話が多いと感じ、女性参加者は“希望：したい”形式では“終助詞なし”と“ね”の発話が多いと感じることが明らかになった。このことから、発話形式(発話場面)によっても“終助詞なし”、“よ”、“ね”の発話の仕方に違いの感じられることが明らかになった。

### 考察

本研究は、主に2つの観点から結果を整理した。まず第1に、参加者の周囲に存在する人物の発話に関する印象として、“父親”の発話には全般的に“終助詞なし”が多いと感じ、“母親”の発話には、“父親”に次いで全般的に“終助詞なし”が多いと感じる傾向があり、“表面的なつきあいの友人”の発話には全般的にはっきりとした傾向が見られず、“気持ちのあえる友人”の発話には全般的に“よ”や“ね”の発話が多いと感じる傾向のあることが

明らかになった。山口・吉澤・原野(1989)は、高校生男女の参加者に共通して、“父親”は心理的距離が遠く、“母親”は“父親”に次いで心理的距離が遠く、“親友”は心理的距離が近いことを明らかにしている。こうした知見を参考にすれば、参加者にとって一般に権威のある存在であり、心理的距離の遠い“父親”は、全般的に“終助詞なし”を多く発話し、“父親”に次いで心理的距離の遠い“母親”も、“終助詞なし”をやや多く発話し、心理的距離の近い“気持ちのあえる友人”は、全般的に“よ”や“ね”を多く発話する印象をもたれるのだと解釈できる。このことは、参加者との心理的距離が近く社会的関係が身近である程、その人物は参加者に対して終助詞表現を多く用いる可能性があることを示している。

この他、“勧誘：しよう”形式、“認識”形式、“(応答)否定の希望：したくない”形式では、両親の発話と友人の発話との間で異なる印象もたれることが明らかになった。

以上の結果から、話し手が聞き手と心理的・社会的にどのような関係にあるかというレベルによって、“終助詞なし”、“よ”、“ね”の発話の仕方に違いの感じられることが明らかになった。こうした結果は、少なくとも本研究が採用した“終助詞なし”、“よ”、“ね”に言い換え可能な典型的発話文に対して、参加者が田中(1999)の指摘する“心理的位相”としての特徴を感じ取ったことを示すものである。

第2に、終助詞表現の発話される形式(発話場面)に関する印象として、“評価：したほうがいい”形式では一貫して“よ”の発話が多いと感じ、“勧誘：しよう”形式では全般的に“終助詞なし”と“よ”の発話が多いと感じ、“認識”形式では全般的に“ね”の発話が多いと感じ、女性参加者は“希望：したい”形式では全般的に“終助詞なし”と“ね”の発話が多いと感じることが明らかになった。また、応答場面の発話として設定した“(応答)否定の希望；したくない”形式と“(応答)認識”形式では、全般的にはっきりとした傾向が見られなかった。

以上のことから、日常会話には、話し手と聞き手との心理的・社会的関係を背景とした終助



詞表現の使い分けとは別に、特定の終助詞表現が全般的に発話される印象をもたれる発話場面の存在することが明らかになった。

さらに、本研究を通して得られた以下の3つの事実を考察すると、“よ”と“ね”の性質の解明につながる新たな手掛かりが見出される。

まず、第1の事実として、聞き手との心理的・社会的な関係を反映して、“よ”や“ね”が使い分けられることが明らかになった。このことは、“よ”や“ね”が“意味情報”としての性質をもたず、聞き手に対する“話し手の態度表明”もしくは“操作指令”としての性質をもつことを意味している。次に、第2の事実として、権威のある存在であるとされる“父親”は、“よ”や“ね”をあまり発話しない印象をもたれることが明らかになり、参加者との心理的・社会的関係の身近な人物が“よ”や“ね”を多く発話する印象をもたれることが示唆された。このことは、“よ”や“ね”の性質が、聞き手に対する“操作指令”よりも、聞き手に快く受け入れられる可能性の高い“話し手の態度表明”に近いものであることを示唆している。さらに、第3の事実として、“よ”や“ね”が“依頼：して”形式ではあまり発話されず、“評価：したほうがいい”形式や“認識”形式で多く発話される印象をもたれることが明らかになったが、このことも、“よ”や“ね”の性質が“操作指令”よりも“話し手の態度表明”に近いものであることを示唆している。以上のことから、終助詞“よ”と“ね”の“話し手の態度表明”としての性質が示された。

なお、本研究全体を通して得られた以下の結果は、将来的に、学校教育をはじめとする様々な現場に応用される可能性を示している。すなわち、教育現場における教師は、一般に、“評価：したほうがいい”形式と関係する発話場面では“よ”を発話し、“勧誘：しよう”形式と関係する発話場面では“終助詞なし”と“よ”を発話し、“認識”形式と関係する発話場面では“ね”を発話することが、生徒にとって自然であると感じられる可能性が高い。また、教師は“希望：したい”形式と関係する発話場面では“終助詞なし”と“ね”を発話することが、女子生徒にとって自然であると感じられる可能

性が高い。さらに教師は、生徒との心理的距離が遠い段階においては“終助詞なし”を発話し、生徒との関係が親密なものに近づくにつれて終助詞表現を発話していくことが、生徒にとって自然であると感じられる可能性が高い。以上の仮説は、将来的に、学生をクライアントとしたカウンセリングの現場にも適用できるかもしれない。人間関係が言葉の使用に与える効果をより具体的に検証するため、文脈との関係を考慮に入れたさらなる研究が求められる。

本研究は、質問紙調査法によって、“終助詞なし”、“よ”、“ね”の各文末表現に言い換え可能な8種類の典型的発話文を参加者に提示し、各文末表現を普段周囲の人物がどの程度発話すると感じるのか、発話に対する参加者の印象傾向を調査した。8種類の発話文は、“終助詞なし”、“よ”、“ね”間の評定平均を比較するため設定されたもので、発話文そのものが周囲の人物にどの程度発話されるのかを検証することには適していない。また、本研究は発話形式（発話場面）という観点から典型的発話文を選定したが、日常会話の場面から典型的発話文を抽出する方法についても検討が必要だろう。

今後は、参加者が発話場面に応じた聞き手との人間関係の中で、実際に終助詞表現をどのように使い分けるのか、実験の実施を視野に入れ、研究を発展させたい。

## 脚注

- 1 文法研究では、“モダリティ”という術語は、一般に、話し手による発話文の叙法を意味する概念として使われている。例えば、宮崎（2002）は“モダリティ”を“言語活動の基本的単位としての文の述べ方についての話し手の態度を表し分ける、文レベルの機能・意味的カテゴリーである”と説明している。
- 2 “認識”形式について、宮崎（2002）は“命題内容に対する認識的な捉え方を示しながらの叙述である”と説明している。この形式は、しろ、して、しよう、等の形態的観点ではなく、発話内容の捉え方という観点から“認識”と命名されており、主に、知覚や伝聞による認知情報に基づき物事の有様を示す現象描写文が、例文として挙げられている。

3 宮崎 (2002) には“問いかけ”形式も含まれるが、この形式では“ね”という文末形式だけが使用でき、“終助詞なし”と“よ”の文末形式は使用できない。このため、本研究では発話場面に“問いかけ”形式を採用しなかった。

#### 引用文献

大坊郁夫 (1982). 二者間相互作用における発言と視線パターンの時系列的構造 実験社会心理学研究, 22, 11-26.

福島和郎・岩崎庸男・渋谷昌三 (2006). 終助詞“よ”と“ね”に関する研究の動向 目白大学心理学研究, 2, 65-74.

蓮沼昭子 (1988). 続・日本語ワンポイントレッスン2 月刊言語, 17(6), 94-95.

井出祥子 (1999). 敬語は何をするものか——敬語のダイナミックな働き——日本語学, 18(8), 55-68.

Kajikawa, S., Amano, S., & Kondo, T. (2004). Speech overlap in Japanese mother-child conversations. *Journal of Child Language*, 31, 215-230.

金水敏 (1993). 終助詞ヨ・ネ 言語, 22(4), 118-121.

Levinger, G., & Snoek, J. D. (1972). *Attraction in relationship: A new look at interpersonal attraction*. General Learning Press.

益岡隆志 (1991). モダリティの文法 ころし

お出版

Maynard, Senko K. (1993). *Discourse modality: Subjectivity, emotion and voice in the Japanese language*. Amsterdam: Jhon Benjamins.

宮崎和人 (2002). モダリティの概念 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 モダリティ 新日本語文法選書4, pp.1-15.

野田春美 (2002). 終助詞の機能 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 モダリティ 新日本語文法選書4, pp.261-288.

岡本真一郎 (1993). 情報の関与と文末表現——間接形と終助詞“ね”の使用への影響——心理学研究, 64, 255-262.

杉戸清樹・尾崎喜光 (2006). “敬意表現”から“言語行動における配慮”へ 国立国語研究所 言語行動における“配慮”の諸相 ころしお出版, pp.1-10.

鈴木英夫 (1976). 現代日本語における終助詞のはたらきとその相互承接について 国語と国文学, 53(11), 58-70.

田中章夫 (1999). 日本語の位相と位相差 明治書院.

綿巻徹 (1997). 自閉症児における共感獲得表現助詞“ね”の使用の欠如: 事例研究 発達障害研究, 19, 146-157.

山口正二・吉澤健二・原野広太郎 (1989). 生徒と教師の心理的距離に関する研究 日本カウンセリング学会第22回大会発表論文集, 104-105.

## Human relations which listeners suppose on the basis of the sentence final particles “yo” and “ne”

Kazuro Fukushima Mejiro University, Graduate School of Psychology

Tsuneo Iwasaki Mejiro University, Faculty of Human and Social Science

Shouzo Shibuya Mejiro University, Faculty of Human and Social Science

Mejiro journal of Psychology.2007 vol.3

### Abstract

Although few studies have been published on the sentence final particles as phase words, it is possible that the sentence final particles “yo” and “ne” are properly used on the basis of psychological and social factors. We presented the participants with the typical sentences accompanied by “yo”, “ne” or no particle, and asked them to rate how often the six types of persons speak the sentences with each particle. The following results were obtained. First, many utterances of father accompanies no particles, and the impression on utterances of friends differ from that of parents depending on utterance scenes. Therefore, this study suggests that the participants feel differences of expression with the particles depending on human relations, and that the particles function as phase words. Secondly, some relationships have been found between the form of utterance scene and the sentence final particles, such as between “judgment” form and “yo”, “description” form and “ne”, “proposal” form and no particle or “yo”. It is concluded that we properly use the particles depending upon human relations as well as utterance scenes.

**Key words** : the sentence final particles “yo” and “ne”, phase words, human relations, impression, utterance scene.